

〔初出一覧〕

ホトトギス		文芸誌『群系』第八号	1995年8月
菌医者に通う		文芸同人誌『風』第三号	1991年1月
ひかり		文芸同人誌『風』第十号	2014年7月
たそがれて		文芸同人誌『風』第七号	2001年3月
ピアス		ホームページ『WEB風』	2010年8月
アカシア		ホームページ『WEB風』	2011年10月
我らの旗		文芸同人誌『風』第八号	2006年7月
バーボン・ロック		ホームページ『WEB風』	2010年10月
イフ・ユー・ビルドゥ・イットウ		文芸同人誌『風』第九号	2009年7月
武蔵野の家		文芸同人誌『風』第八号	2006年7月

あとがき

文章を継続的に書くようになったのは二十代の後半からだった。人に請われて『ふるさと紀行』という季刊雑誌に、三年にわたり原稿用紙五枚の原稿を十数編寄せた。これが自分の文章を公にすることの出発点でもあった。その後は個人的な文章活動として、同人誌『精華』に参加し、それを引き継ぐ形で同人誌『風』を創刊した。『風』は現在も続いているが、この三十数年間に発行したのは第十六号までである。この間には紙媒体の『風』とは別に、簡便に書き溜めることを目的としたホームページ『月刊WEB風』も立ち上げた。このサイトが目に残ったのだと思うが、二〇二二年には思いもよらず、作家・林真理子が会長の「日本文藝家協会」の担当者から、同協会の『文藝年鑑』に全国の同人誌紹介として「貴誌」の誌名・住所を掲載したい、という旨の書簡を戴いた。願ってもないことなので即座に承諾して返信し、小さな活字ながら『風』の名が毎年掲載されることとなった。これによって『風』の同人たちは、文芸活動を展開している一集団として認められた。

今回この短編集には、自分が一九九一年から二〇一一年までに書いた古い文章のうちの十一編を収録した。書名は、最後に配置した編の題名「武蔵野の家」をそのまま書名とした。文芸のジャンルは何かと言ったら小説である。それぞれの短編のストーリーは、自己

の体験を基にしたものが殆どだが、完全な実話ではなく、多くのフィクションが含まれている。そうした意味では小説に属するものであり、いわゆる私小説と分類されるのかもしれない。こうした文章スタイルを選択するきっかけになったのは、阿部昭の小説『単純な生活』だった。この作品はエッセイか小説か判別の着かない作品と評されているが、同書の中で筆者ははっきり「小説」と言っている。「内向の世代」と呼ばれた作家・阿部昭は一九八九年に五十四歳という幾分早い年齢でこの世を去った。これまで数多くの小説を読んできた中で、同氏の文章スタイルは最も自分に合っていると思った。そうしたことから、私は長い間この作家に私淑してきた。

いくつかの文章についてコメントしておきたい。「歯医者に通う」を書いたのはほぼ四十年前だが、この中の「森歯科医院」「森先生」「塩見さん」は実名であり、他は皆仮名である。塩見信さんは既に他界されたが、森正幹先生は引退されて現在も健在にお暮らしである。世の中にはこうした「歯医者」もあるのだということを世に告げたいと思い続けてきたが、今回の書籍化によって小規模な拡散ではあるがその願いは達せられたと思う。

「武蔵野の家」について、この中に登場する「宮坂万智子」という女性のモデルは、現在ではもう知る人はいないだろうが、作家「宮本美智子」さんである。亡くなってから三十年近くにもなるが、何かの縁だっただろうから、今更ながらではあるが御冥福をお祈りする。「バーボン・ロック」は、バーボンウィスキーにオン・ザ・ロックをくっ付けた出鱈目な言葉の題名である。沢木耕太郎の著書に『バーボン・ストリート』という作品があり、タ

イトルの由来についてあとがきで、「バーボンとも、ストリートとも関係ないから、バーボン・ストリート」と付けたとしており、そんな適当さを私は真似たのだが、これこそ顰みに倣うというものだろう。

「アカシア」では、稲城市の圧巻のアカシア林を描きたかった。

「われらの旗」は、細かなことまで描いていて水泳に関心のない人には退屈だろう。当時の自分にはリアルな体験としてどうしても書き残しておきたい気持ちがあったのだと思う。

文章を書く作業はいつの時も苦しい。すらすらと書けた試しがない。それでも書き続けてきた文章の中には自分自身が生きている。しかし、書籍化しないと言葉に生命は吹き込まれないように感じている。ネットでの公開では、言葉はただ中空を彷徨っているだけで実体を伴っていないように思う。紙面とネットを合わせ、これまでに書いてきた文章はまだ多量に埋もれている。これらをどのように書籍化していくか、現在思案中である。

最後に、私を文章の人生に導いてくれた高村葉子さんと、ともに文章修行の道を歩んできた大堀敏靖さんに深甚の感謝を捧げます。ありがとうございます！

二〇二四年 九月九日